

八幡神社（坂井町五本）の建築

吉田 純一*・有田 幸代**・栗原 香織**

Historical Architectures of Hachiman-Shrine in Gohon, Sakai-Cho, Fukui Prefecture

Junichi YOSHIDA・Sachiyo ARITA・Kaori KURIHARA

Hachiman-Shrine is located in Gohon, Sakai-cho, Sakaigun, Fukui prefecture. The architectures of Hachiman-Shrine is constructed three buildings, Honden, Haiden and Heiden. Honden is the house for God. Haiden is the place for paryer. Heiden is the connect building to Honden and Haiden.

In this paper, we consider the architectual style, scale, age and so on of these three buildings.

1. 八幡神社の概要

八幡神社は福井県坂井郡坂井町五本19-11に鎮座している。祭神は天兒屋根命で、例祭は毎年10月15日、旧社格は村社、氏子は五本地区の54戸である。

境内入口にたつ一の鳥居や石碑には「八幡神社」とあり、明和4年（1767）の年紀をもつ「八幡大菩薩」の篇額（へんがく）も拝殿内に所蔵されているが、二の鳥居には同じ明和4年の「住吉大明神」の篇額が懸けられている。したがって、今から約220年前の江戸時代、明和年間にすでに住吉神社も当社に合祠されていたことがわかる。五本地区内を南北に走り抜けている通りは旧北陸街道であり、当地区は古くから南の長崎宿（称念寺）と北の金津宿を結ぶ街道沿いの集落として開けていたものと思われる。

八幡神社はこの地区の北寄り、西端にある。背後に用水路が設けられているために現在の境内地はややいびつな形をしているが、広さは約1,120平方メートル、坪数にしてほぼ340坪である。通りから少し西に入ったところに大鳥居（一の鳥居）がある。社殿はその西奥に東面しており、参道にはやや小振りの二の鳥居や一对の燈籠・狛犬が置かれている。そして、社殿の右手後方、北寄りには境内社の稲荷神社も鎮座している。社殿の南側は竹藪、西側は杉林となっている。

* 建築学専攻 ** 当時大学院生（平成6・7年度）

当社がいつ創立されたのかは不明である。『福井県神社誌』（福井県神社庁、平成6年9月発行）によると、文化10年（1813）4月に社殿が再建されたといい、これが最も古い記録になっている。しかし、今回の調査で、二の鳥居に「元禄十四年」の刻銘（こくめい）が見つかった。元禄14年は西暦にして1701年であり、遅くとも今から300年ほど前にはすでに鎮座していたことが確認できる。

明治以降になると、明治44年6月25日に社殿改築の許可があり、翌45年6月に改築されたとある（『福井県神社誌』）。また、拝殿の小屋裏から発見された上棟札（じょうとうば）によれば、昭和23年6月28日の福井大地震で被害を受け、本殿と拝殿は倒壊した。そして、「転覆」した本殿はそのまま建て起こしたとあり、倒れた建物を起こして再用したことがわかる。しかし、拝殿の方はそれから6年後の昭和30年9月末に新たに再建されている。ちなみに、本殿を建て起こしたという言い伝えは今も当地区民に語り継がれている。

2. 八幡神社の建築

（1）複合社殿について

当社の社殿は前方から拝殿・幣殿・本殿の3棟の建物が一列に連なる複合社殿（ふくごうしゃでん）である。本来、神社の建築は神の住まいである本殿だけが存在していたが、次第に神を拝む人のための空間すなわち拝殿（はいでん）がつくられるようになった。それがさらに進んで本殿と拝殿の間に屋根をかけた幣殿（へいでん）がみられるようになり、複合社殿が成立するに至った。祭祠の際に拝殿と本殿のつながりがスムーズになるよう幣殿が必要になったのである。

徳川家康を祠る日光東照宮（栃木県）や伊達政宗の大崎八幡宮（宮城県）などもこうした複合社殿の例である。しかし、これらの幣殿はまだ板床が張られず、一段低い石敷きのままになっていて、石の間とも呼ばれている。その上、本殿の屋根は拝殿と同じ入母屋（いりもや）形式であり、同じ複合社殿でも日光東照宮や大崎八幡宮は、特に権現造り（ごんげんづくり）と称されている。後述するように、当社の場合、拝殿は入母屋屋根であるが、本殿は切妻（きりむす）屋根の流造り（ながれづくり）であって、この形式は権現造りとは呼ばない。

（2）本殿の建築形式

本殿は神が住む建物であり、神社建築の中で最も重要なものである。当社の本殿は社殿の最も奥にあり、高さ5尺5寸（167cm）ほどの高い石積みの基壇の上にたっている。拝殿からみると、本殿は奥まった、薄暗がりの中に見え、しかも少し仰ぎみる位置にあるから、深奥感や神々しさを強く感じる空間構成になっている。

本殿自体の建築形式は、正面、側面ともに柱間が1つの身舎（みや）とその前方に向拝（こけい）がつく、いわゆる一間社流造り（いっけんしゃながれづくり）という形式である。一間社とは身舎正面の柱間（しらま）がひとつであることを意味しており、流造りとは側面からみて、前方の屋根が長く、後方が短くなっている形態をいう。前方が後方より長くなるのは、屋根の一番高いところ（棟、むね）が身舎の中央にあって、前方は向拝まで屋根が延びているためである。

一間社といっても身舎の正面の柱間の長さは2.11mあって、一般にいう1間＝6尺すなわ

ち1.82mではない。また側面も1.53mであり、こちらは1.82mより小さい。そして向拝の長さは1.155mである。小さな本殿といえよう。

屋根は桧瓦葺（ひのわら）で、棟も瓦積みであるが、両端の鬼瓦（おにがわ）は、福井市足羽山麓で採れる笏谷石（しやくたに）製である。

正面には、両折れ（りょうせ）の桧唐戸（ひのからど）の扉4枚がたち、中央寄りの2枚は上半分に花狭間（はなざま）の格子窓がついている。両側面と背面は横羽目（よこめ）の板壁で、外回りは下見板（しもみいた）を張っている。

内部は板床（いたど）で、棹縁天井（さおえりてんじょう）とし、後方に高さ1尺4寸、幅1尺3寸の壇をつくって、内陣（ないじん）を横に3室並べている。そしてそれぞれの内陣の正面に両開きの板扉（いたひら）を設けている。

身舎柱（みよけしら）はほぼ6寸径のケヤキの丸柱で、地覆石（じふくい）上に回した土台の上になっている。柱上の組物（くもつ）は大斗（だいと）と十字の肘木（ひじき）、その上に3つの巻斗（まきと）が並ぶ、出三ツ斗（でみつと）という形式で、正面と妻面の中備（なかぞね）は墓股（かぶまた）である。そして妻飾り（つまざり）は虹梁（にりょう）と冢叉首（いづさず）で、猪目懸魚（いのめげい）がついている。

向拝には5級の木階（もくかい）がつき、身舎の床面は拝殿や幣殿より4尺3寸余り高くなっている。向拝の柱はやはりケヤキ材であるが、下端に礎盤（いしばん）をもつ約4寸6分の角柱（かくしら）で、柱面（しらめん）は手の込んだ凡帳面（きょうめん）に仕上げられている。身舎柱とは海老虹梁（えびにりょう）でつなげられている。柱上の組物はやはり出三ツ斗であるが、大斗には下端に皿斗（おらと）がみられる。また向拝柱同志をつなぐ正面の水引虹梁（みずひきにりょう）の上につく竜をデザインした墓股（かぶまた）も注目されよう。

（3）拝殿の建築形式

本殿が神の住まいであるのに対して、拝殿は神を拝むために設けられた人のための建物である。当社の拝殿（はいでん）は桁行（けたぎ）3間、梁間（はりま）2.5間の入母屋屋根、桧瓦葺の建物で、正面に1間の向拝がついている。なお、柱間の数は正面、側面ともに3つであるが、正面、側面ともに中央間は出入り口になっていて、脇の柱間のほぼ倍の大きさになっている。実際の長さは正面が5.625m、側面が4.76mで、1間＝6尺として換算すれば、正面はほぼ3間、側面は2間半となる。

本殿同様、基壇（きだん）上にたつが、その高さは1尺2寸余で、本殿に比べると低い。縁（いん）は前方にのみつき、正面前方に1間の向拝があって、4級の木階に続いている。柱はほぼ5寸2分の角柱で、やはり地覆石・土台の上にたち、軸部（じくぶ）に縁長押（いんがし）・内法長押（うちのりがし）を回し、上端は頭貫（かぶし）と台輪（だいりん）で緊結されている。組物は大斗（だいと）と肘木（ひじき）に3つの巻斗（まきと）からなる平三ツ斗（ひらみつと）形式である。

正面の3間はともにガラス入りの腰高格子戸（こしだかこうしど）とするが、出入り口となる中央間は2枚を両側に引き分け、両脇間は1枚をはめ殺しとしている。なお、正面中央間だけは内法長押はなく、それより一段高い位置に虹梁（にりょう）を渡している。両側面は中央間が板戸2枚引き

違いとなり、前後の両脇間は板壁である。後方は幣殿に続く中央間は上方に虹梁を入れるだけで、建具をたてず開放のままとし、その左右両脇は2尺余背後へ張り出した棚を造り、それぞれに隨身像（ずいしんぞう）を一体づつ納めている。内部は全面に畳が敷かれ、天井は格天井（こうてんじょう）となっている。

向拝の幅は正面中央間と同じで、向拝柱は身舎柱筋より7尺6寸ほど前方にあり、海老虹梁で緊結され、柱上の組物もやはり出三ツ斗形式である。水引虹梁の中備（なかせう）には墓股（かむり）がみられ、虹梁の木鼻は獅子頭（ししめ）の彫刻で飾られている。なお、向拝柱上の大斗にも本殿の向拝柱と同様、皿斗（はらと）がみられる。

（4）幣殿の建築形式

幣殿は拝殿と本殿をつなぐ建築で、棧瓦葺（せんがらぶき）、両下造り（りょうさづくり）という形式になっている。規模は桁行13尺1寸（3.96m）、梁間9尺3寸2分（2.825m）である。床は板敷き、両側の中央間に奥行き1尺3寸ほどの収納部が取られ、板の両開戸がみられるが、他はすべて板壁で閉ざされている。天井はなく、屋根裏がそのまま見えていて、拝殿よりもっと簡素である。

3. 建築年代について

今回の調査で拝殿の小屋裏からみつかった上棟札に「（前略）拝殿倒壊、本殿転覆、本殿は其尽起し（嘉永年間、大関東村伊藤竹右エ門之を建つ）、同三十年二月四日初集会に八幡神社再建の儀まとまる、同九月末日完成、金津町南正田佐藤弥三治の手により完成（後略）」とある。

つまり、本殿は江戸時代末期の嘉永（かい）年間（1848～54）に大関東村の大工伊藤竹右エ門によってつくられ、昭和23年6月の福井地震で倒壊したが、そのまま建て起こしたことがわかる。今も受け継がれている言い伝えと同じである。

そして今回の調査によれば、向拝部や妻部の虹梁の端にみられる渦（うず）や若葉（わがは）の彫刻、絵様（えよう）あるいは妻部や水引虹梁の上の墓股などの形式は、ほぼ江戸時代末期、幕末期に流行した様式とみてよい。

したがって、現在の本殿がつくられたのは上棟札がいう嘉永年間とみてよく、西暦にして1850年ころ、今から140～150年ほど前の建築となる。

一方、拝殿は本殿と比べれば、風触（ふうふく）の具合も少なく、柱などの部材は一見して新しく、地震で倒壊した後、昭和30年になってつくられたものであることは疑いない。上棟札はこの時に打ち付けられたのであろう。ちなみに拝殿をつくった大工は上棟札（その1）では金津町南正田の佐藤弥三治とあるが、同（その2）によれば弥三吉は福井市佐藤佳枝上町の棟梁であり、川西村（榎内）や丸岡町（山形）、金津町（細鉄、横越）の大工たちも関わっていたことがわかる。

なお、幣殿については上棟札には記載がないが、これも拝殿と同じ時につくられたのであろう。

4. 建築的特徴とその意義

以上、八幡神社の本殿と拝殿および幣殿について建築形式や建築年代について述べてきたが、次のような特徴や意義を指摘できよう。

(1) 本殿は江戸時代の古建築

本殿は一間社の小規模な建築であるが、成立年代をほぼ嘉永年間と確定でき、坂井町域に残る数少ない、江戸時代の古建築のひとつである。創建後の大きな改変は認められず、虹梁の絵様や臺股の様式も幕末期に相応したものである。全体的なプロポーシオンも小振りながらもよく整っている。

福井県内には一間社の本殿の遺構は数多く現存しており、とりわけ当社の本殿が優れているというものではない。しかしながら、坂井町域にかぎってみると、福井大地震で被害を受け、その後、新たに再建されたものがほとんどである。したがって、当社の本殿は、地震で「転覆」はしたものの、江戸時代のものがそのまま現存している点で珍しく貴重な遺構といえよう。

(2) 本格的な複合社殿

一方、拝殿と幣殿は昭和30年代の建築であり、まだ新しく、歴史的価値をもつには至らないが、江戸時代以来の形式を忠実に伝える正当的な建物である。特に拝殿の正面の向拝の虹梁や臺股、木鼻の彫刻は見るべきものがある。

そして、『福井県神社誌』によると、坂井町域には拝殿の背後に本殿を突出させただけの簡素な形態をもつ社殿もみられる。これに比べれば、当社は建築年代は新しいものの本格的な拝殿を備え、幣殿、本殿とともに複合社殿としてきわめて整った形態を今に伝えている。この点も注目されよう。

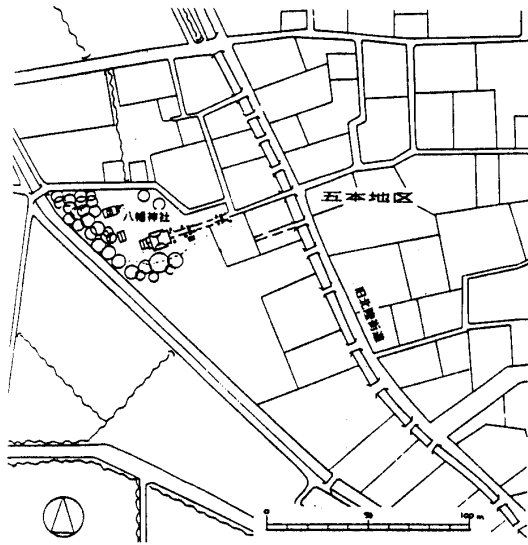
(3) 八幡神社を地域おこしの拠点に

今日、それぞれの地域や町が総ぐるみで、住みよい地域づくり、町づくりに取り組んでいる。坂井町やこの五本地区でも同様であろう。こうした活動の方策や手掛かりは様々なものがあるであろうが、五本地区にあっては、この八幡神社の社殿や境内を拠り所とするのも手であろう。

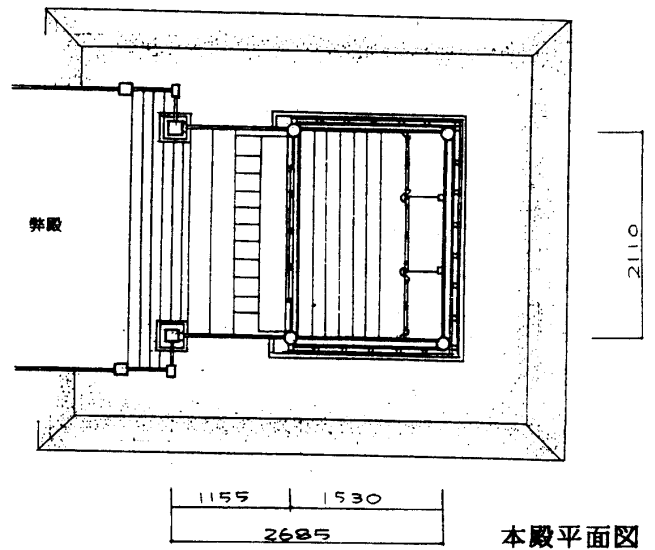
神社やその境内はひと昔前まではまさに地域や集落のコミュニティーの場であった。子供たちの遊び場であり、盆踊りの輪がつくられた場、そして、近所のおばちゃんたちの井戸端会議の場でもあった。何も昔を懐かしみ、そのままよみがえらせるわけではないが、五本地区の歴史的、文化的価値を今に伝える八幡神社の社殿や境内を守りながら、そしてうまく活用しながら五本地区独自の地域づくりを考えてみるのも一案ではないだろうか。

◆後記

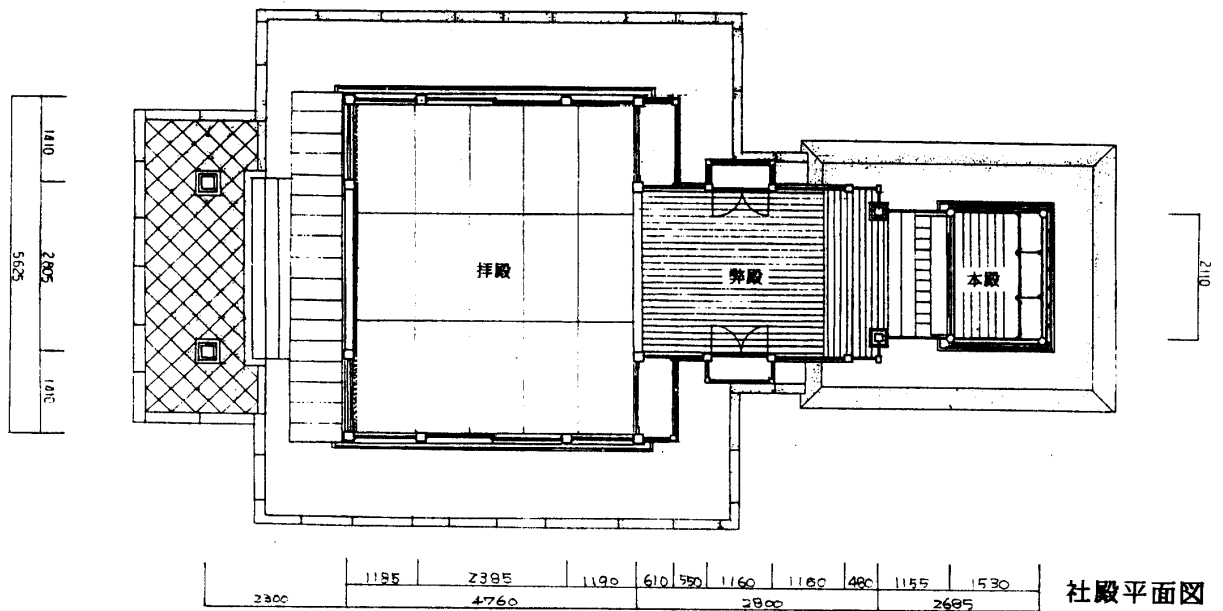
この調査は坪田守衛氏（平成7年度五本地区長）より依頼を受け、平成7年7月に実施した。調査員は著者ら3名と千藤克則・平山健治両君（ともに平成7年度調査委員）で、資料の整理や図面作成も5名が分担して行なった。さらに平成8年4月以降は中土桂子君（同8年度）の協力も得た。



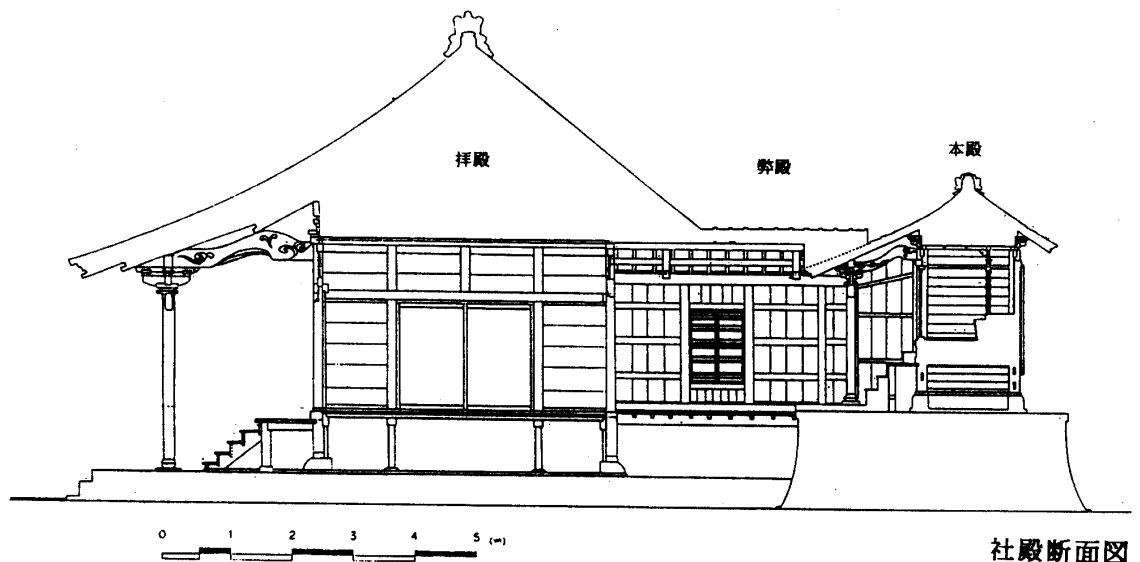
境内配置図



本殿平面図



社殿平面図



社殿断面図

◆記録や刻銘

(1)上棟札

2枚ともに拝殿の小屋裏の梁に打ち付けられている。

・（その1）（たて30.5cm、横106cm）

「昭和二十三年六月二十八日
 后五時二十四分突如として
 起る福井大地震のため
 拝殿倒壊 本殿転覆
 本殿は其尽起し（嘉永
 年間 大関東村伊藤竹右エ
 門之を造つ）
 同三十年二月初集金
 に八幡神社再建の備まるとる。
 同九月末日完成
 金津町南足田佐藤弥
 三治の手により完成
 区 長 徳田幸平
 委員長 山本平右エ門
 会 計 坪田津久志
 委員 坪田源之丞
 徳田智吉
 坪田智之丞
 山口吉蔵
 伊藤伊右エ門
 坪田正実
 北野幸右エ門
 途中死亡

・（その2）

「〇〇五月〇日
 五本八幡神社新築工事
 同 七月三十日 立柱式
 十月十日 落成
 棟梁 福井市佐佐木上町二八
 〇棟梁 坂井郡川西村浄土寺
 坂井郡丸岡町筋谷
 坂井郡金津町笹岡
 坂井郡金津町伊井村池口
 其他三人
 坂井郡坂井村西村
 谷 徳太郎
 谷 正有
 佐藤弥三吉 六十八才
 中垣内 力 二十四才
 山田一男 二十一才
 吉田敬夫 十七才
 小南虎一 三十七才

(2)二の鳥居

・石柱刻銘

「元禄十四年巳七月吉辰」

元禄14年は西暦にして1701年で、今から295年前である。拝殿の左前方に壊れたまま置かれている旧鳥居の柱にも同様の刻銘がみられる。

・住吉大明神の篇額

「明和四乙亥天六月吉日 内田六正之作」

明和4年は西暦にして1767年である。明和4年の干支は乙亥でなく、丁亥であるが、明和年間に乙亥の年はない。

(3)八幡大菩薩の篇額（拝殿内に収納）

「明和四乙亥天六月吉日」

年代は住吉大明神のものと同じであり、現在、拝殿前に崩れたまま放置されている旧鳥居についていたものであろう。

(4)狛犬の台座

「寄進人

大連市

北野定四郎」

(5)一の大鳥居の石柱

「昭和四十五年十二月吉日 建立」

「寄進者 氏子 坪田津久志

田中一夫

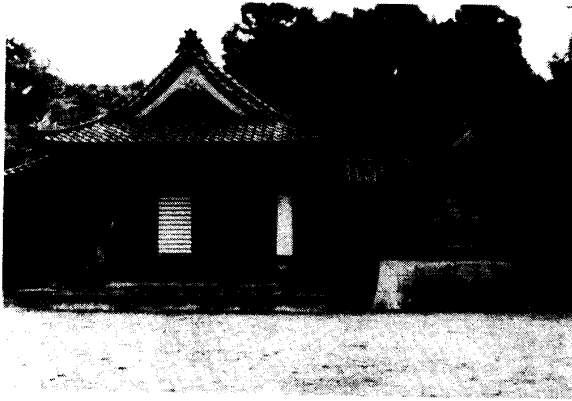
坪田正実

長谷川桂」

(6)八幡神社石碑

「昭和四十五年七月二十日建設 寄進坪田源右衛門 福井地震の高岡雄

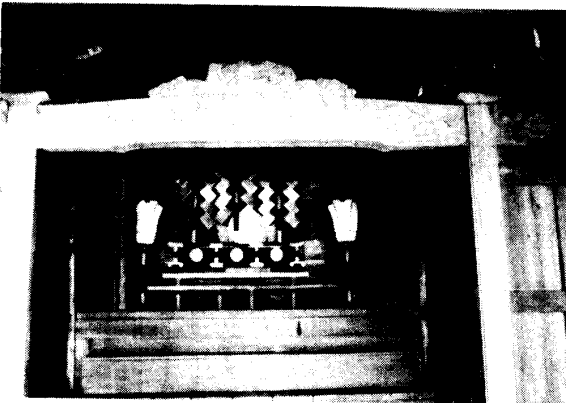
昭和六十二年七月再建 坪田治彦」



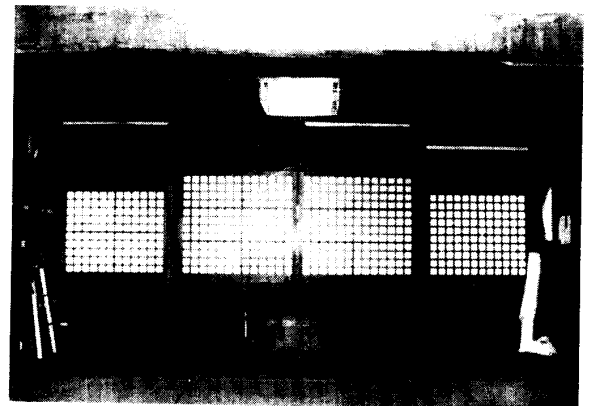
八幡神社殿全景（左より拝殿・舞殿・本殿）



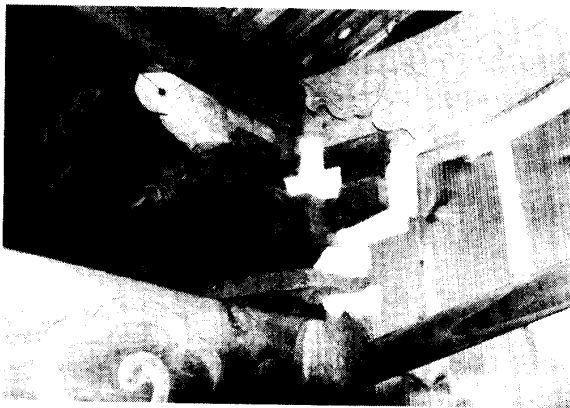
拝殿正面



本殿内部



拝殿内部（東面）



本殿向拝柱上部



舞殿（奥は本殿）



上棟札（その1）



旧島居の村 旧石柱刻銘「元禄十四年・・・」
（平成8年12月6日受理）